＜授業実践３＞「現代の国語」書くこと

１　単元名

説得力のある意見文を書こう

２　指導目標

（1）単元の目標

・主張と論拠など情報と情報との関係について理解することができる。（〔知識及び技能〕（2）のア）

・目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にすることができる。（〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ「書くこと」（1）のア）

・読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫することができる。（〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ「書くこと」（1）のイ）

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。（「学びに向かう力、人間性等」）

（2）言語活動

ア　言語活動

文章展開や構成を理解し、有効な反論を用いた意見文を書く。

イ　言語活動のねらい

実社会において多様な他者と交流し、自分の意見をもち他者に述べる機会が増えている。自分と背景が異なる他者に説得力をもって意見を述べる力を養いたい。

（3）教材

「意見を書く」（『現代の国語』大修館書店）

高階秀爾「『美しさの発見』について」（『現代の国語』大修館書店）

齋藤孝『退屈力』（文春新書）

（4）学習者観

形式段落の情報を精査し、中心となる文章を抜き出すなど、読む力は定着しつつあるが、それらの題材から自らの意見や主張をまとめる力は弱い。文章構成の基礎知識を確認し、実際にそれらを用いて意見文を書くことで、論理的思考力の向上を図りたい。

（5）主体的・対話的で深い学びの工夫

自己の主張とは異なる意見を自ら提示することで自己の意見の不足部分を考えさせ、補強する機会を設ける（主体的）。

書き上げた意見文を読み合い、規準の下今回の活動に適した意見文を選抜する機会を設ける（対話的）。

単元を通して、意見文を書くことについて自分なりに学んだことや気付いたことを振り返る活動を設ける（深い学び）。

３　観点別学習状況の評価

（1）単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。	「書くこと」において、目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にしている。 「書くこと」において、読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫している。	複数の自らと異なる意見の中から適切な意見を選び抜き、それを用いた意見文を書く活動を通して、粘り強く取り組もうとしている。

(2) 評価方法

ア　知識・技能

定期考査において評価する。

イ　思考・判断・表現（書くこと）

ワークシートの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
自己の主張と異なる意見の視点が妥当性や信頼性を吟味し、適切に設定したものである。（B「書くこと」(1)のア）	自己の主張と異なる意見の視点が、妥当性や信頼性の点において適切であり、より効果的に自己の主張の説得力を増している。	自己の主張と異なる意見の視点が適切に設定している。	自己の主張と異なる意見を用いて書いている。
読み手の理解が得られるよう論理の展開を考え、文章の構成や展開を工夫している。（B「書くこと」(1)のイ）	論理的な文章構成で展開も魅力的な意見文を書いており、読み手の理解を得るための工夫が見られる。	論理的な文章構成で意見文を書くことができ、読み手の理解を得るための工夫が見られる。	与えられた題材で意見文を書いている。

ウ　主体的に学習に取り組む態度

ワークシートの記述によって評価する。

	評価A	評価B	評価C
考えが的確に伝わる文章を書こうと粘り強く異なる意見の選択に取り組もうとしている。（α）	考えが的確に伝わる文章を書こうと粘り強く異なる意見を精査している。	考えが的確に伝わる文章を書こうと粘り強く異なる意見の選択に取り組もうとしている。	考えが的確に伝わる文章を書こうとしている。

他者の感想などを踏まえて、自分の文章の課題を捉え直そうとしている。（β）	他者の感想などを踏まえて、自分の記述の改善に努め、更に今後の学習に生かそうとしている。	他者の感想などを踏まえて、自分の記述の改善点に気付き、今後の学習に生かそうとしている。	他者の感想を踏まえて、自分の記述の改善点に気付いている。

※　α・βは、それぞれ「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」とする。

４　単元の指導計画（配当４時間）

次(時間)	学習活動	言語活動における指導上の留意点 ＊生徒への支援の手だて	評価上の留意点 ◇観点　□点検・確認■分析 ＊「努力を要する状況」と評価した生徒への支援の手だて
第1次（1時間）	・単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ・論理展開の型「起承転結」を理解する。 ・齋藤孝『退屈力』の一部を用い、四段構成の確認を行う。 ・意見文の本題「尊厳死」についての問題を考える。	・以前に学習した教材を用い、「起承転結」を復習させる。 ・本文を４つの意味段落に分け、それぞれどのようなことが述べられているかまとめさせる。 ・資料を配付し、現時点での率直な意見を書かせる。	◇(知) □「記述の点検」（ワークシート１）
第2次（2時間）	・本題に対し、３つの視点ごとに賛否（想定される異なる意見）を列挙する。 ・列挙した主張、異なる意見から重要度の高いものを選び、意見文の軸とする。 ・意見文を書く。	・問題点ごとに賛否それぞれの考え方があることを理解させる。また、クリアすべき異なる意見を可視化させる。 ・構成の型に注意させる。 ・時間内での完成を目指させる。	◇(思)（態） ■「記述の分析」（ワークシート２） ＊問題点を挙げられない生徒に対し助言する。 ■「記述の分析」（意見文）

第３次（１時間）	・賛成、反対に分かれて意見文を紹介し合い、より納得できる作品を選抜する。 ・活動の振り返り	・意見文の選抜は「主張の明確さ」「異なる意見に対する考え」の２点を規準とする。 ・意見文を書く際に気を付けたこと、他者の意見文を読み気付いたことを記述させる。	◇（思）（態） □「行動の観察」（意見交換の様子） ■「記述の分析」（ワークシート３）

５　本時の指導計画

（1）本時の具体的な目標

より有効な異なる意見を用い、意見文を書くことができる。

（2）本時の具体的な評価規準

論拠や異なる意見を精査し、意見文を書いている。

（3）本時（全４時間中の３時間目）の指導計画

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 （５分）	・本時の目標、活動内容を確認する。	①前時の内容と本時の活動を確認する。	①時間内での完成を指示する。
展開 （40 分）	・前時までの内容を踏まえ、自らの考えを記述する。	②構成の型を用いて書く。 ③前時に列挙した論拠や反論を用いて書く。	②③ワークシート１・２を活用し、内容をまとめさせる。 ■意見文を回収し、ルーブリックを用いて「記述の分析」により評価する。
終結 （５分）	・振り返りをする。	④意見文を書く上で、気を付けたことや意図したことがあれば振り返り、記入する。	④自己の到達度を振り返らせる。 ■ワークシート３を回収し、ルーブリックを用いて「記述の分析」により評価する。

６　研究の実際と考察

（1）第一次における指導

起承転結の「四段構成」と序論、本論、結論の「三段構成」について確認した。今回は「四段構成」を用いることとし、各構成部分の働きに注目した。生徒の実態として「起＝問題提起、主題提示」「結＝まとめ」は理解しやすいが、「承・転」における「筆者の主張」と「一般論」や「反論」との比較や譲歩が用いられていることを理解できている生徒は少なく、本単元では、反論を用い比較や譲歩を有効に活用することが目標であると共有した。

その上で以前に学習した教材を改めて、論理展開といった視点で見直すことで、知識の定着を図った。その際、「以前の学習では、どうしてこの形式段落から意味段落が切り替わるのかよく分からなかったが、今回の内容で理解することができた」といった反応があった。また、「これまでは展開の把握は接続語に頼っていたが、文章内での『働き』という新たな視点をもつことができた」という声もあった。

(2) 第二次（言語活動）における指導

今回意見文を書くにあたり、「異なる意見を用いた論理展開を使用する」ことを第一とした。そのため意見文作成前に二つの段階的指導を設けた。

①本題に対し、３つの視点ごとに賛否（異なる意見）を列挙する。

異なる意見の扱いについて、単に「異なる意見を立てなさい。それを利用して意見文の説得力を増しなさい」と指示すると、生徒が扱いやすい安易な意見や、論拠に釣り合わない意見を提示してしまう恐れがある。問題の視点を考えさせることで、公正な異なる意見を目指した。しかし、それでも事前に立場（賛成・反対）がある程度決まっていたため、異なる意見の想定の際に「クリアできるもの」という意識が垣間見られた。

また、列挙する中で「家族」や「患者」といった今の自分とは別の視点で問題を捉えることができている生徒が多く見られた。

生徒　解答例

問題の視点	賛成	反対
家族	よくなる見込みはなく医療費、精神的負担は大きい。	負担は大きいが少しでも長く一緒にいることが大切。
患者の意思	自分の意思で決定できる。	家族や大切な人を思っての決定は本当に自分の意思といえるのか。
医師視点	患者の負担になるだけの治療の意味は…。	法律で認められていない。罪になる。救うことにつながらない？
医療費	本人、家族、国のお金の負担が減る。	お金の問題ではない。
命の軽視	惨めな姿で生き続けるのは尊厳がない。	命の軽視につながる。そもそも命は選ぶものではない。

②列挙した主張・異なる意見から重要度が高いものを選び、意見文の軸とする。

一番に思い付いたもので書き始めるのではなく、どの理由、根拠を用いることがより説得力の強い意見文となるかを考えさせた。その際、問題点の重要度、解決のための優先度を考えることがポイントであることを指導した。

論理の展開形式と想定される異なる意見の準備ができると、生徒の多くが戸惑うことなく書く活動を進めることができた。それでもまだ書き始められない者に対しては、もう一度論理の展開の型や文例を示した。

(3) 第三次における指導

今回、主たる言語活動は意見文を書くことにあたるが、対話的な学習として意見文の相互確認を行った。賛成派、反対派に分かれ同じ意見の生徒で相互に読み合い、規準（展開の明快さ・問題点の優先度）

に従いより説得力の高い文章を選ぶ機会を設けた。４～５人班では原稿用紙を回し読むことができるが、各班で選ばれた意見文を班を超えて読む際に Teams を用い意見文を共有した。ロイロノートでの提出も手段としては有効ではあるが、一部の生徒の作品のみを提示する際には Teams での共有が適している。

（4）評価について

構成面である、「論理的な文章構成で意見文を書くことができる。」においては論理展開の文例を提示し、ワークシート２で主張・異なる意見を列挙することで、おおむねＢの評価を付けることができた。自己評価をＣとした者が約２割いたが、論理展開に従って意見文を作成することを規準としているため、文例を利用し、主張、根拠、想定される異なる意見、異なる意見に対する意見を適切な箇所に書くことができていれば教員評価はＢとした。また、意見文と振り返り（ワークシート３）を点検し、意図をもって「承・転」の段落を工夫し、その工夫が説得力の強化に反映できている者をＡ評価とした。Ａがついたのは全体の約１割であった。展開については型を用いたことで生徒は工夫できる点が少なく、今回は評価に差が生まれにくい状況であった。

内容面である「自己の主張と異なる意見の視点が適切である。」においてもワークシート２での活動から意見文の分析により約９割がＢ評価となった。残りの１割はＡ評価となった。以下Ａ評価とＢ評価の解答例である。

Ａ評価　（生徒の意見文　要約）

私は尊厳死について賛成です。私はこの問題について「自分の姿」という視点で考えてみました。病気で追い詰められるのは患者本人です。最期の姿は本人の望む姿であるべきと考えます。治療を続けることで少しでも長く生きるべきとの考えもあります。しかし、治療により容姿が大きく変わってしまう恐れがあります。治療を続けても病状が変わらないのであれば、患者の負担は大きく、病気や治療の影響で自分の容姿が悪くなるにつれ生きていることに価値を見いだせなくなると考えます。場合によれば自ら命を投げ出す可能性もあるかもしれません。尊厳死を選ぶことは「自分が自分の認める自分でいる」ことを選択することであり、死を選ぶのではく、生き方を選ぶことだと考えます。

一貫して「姿・容姿」という視点で書かれている。尊厳死を選ぶ＝「姿を保つ」、尊厳死を選ばない＝「望まぬ姿となる」が分かりやすく対比されている。また、なぜその姿が大切であると考えているかという点も説明されている。

Ｂ評価　（生徒の意見文　要約）

私は尊厳死を医療の面から反対します。本来医療は「人を救う」ものであり、死を選択肢として提供すべきではないと考えます。しかし、病気の改善の見込みがない治療は患者にとって苦痛以外の何物でもなく、人道的ではないとの意見もあります。尊厳死を認めてしまうことは、高齢者や障がい者といった人たちへの偏見や差別へとつながることとなり、緩和ケアなどの医療の進歩が止まってしまう可能性があると考えます。また法律で認められていない以上医療に従事している人たちが個人の自由で被害を受けることは許されないと考えます。

「医療」という視点で捉えることができているが、自己の主張と異なる意見の対比が適切ではない。

７　研究の成果と課題

今回の成果として挙げられる点は、内容の精査である。意見文を書く前に「主張、根拠、想定される異なる意見、異なる意見に対する考え」を準備させることで多くもの生徒が円滑に記述することができた。今回、賛否が大きく分かれる「尊厳死」を意見文の主題とした。生徒たちには少し難しいテーマではあったが、これまでに考えたこともない内容であったことから自発的にタブレットを使用し情報を集める様子が見て取れた。そのようなテーマを出題することで、主体的に情報を精査する姿勢を育てることができた。

課題として挙げられる点は、二つある。

一つ目は評価における分析対象が複数にわたったことである。生徒自身が意見文を書く際にどのような点に注意し、書いたのかを確認し、その上でその意図が意見文に反映されているかを確認したため評価に時間がかかってしまった。今後は事前の生徒への簡潔なルーブリックの提示を行うことで評価、分析のスリム化を図りたい。

二つ目は意見文選抜の規準が曖昧になったことである。展開の明快さ・問題点の優先度の二点を規準としたが、型を使用しているため、文章の全体の形式に差が生まれず、自分とは違う視点で書かれたもの、根拠の数が多いものが選抜で優先された。第二次で行った、視点の列挙、精査が読み合う際に活用されなかったことが残念である。この点に関しては今後の「読むこと」の指導の中で考えていきたい。

今回の授業を通して意見文の型を多くの生徒が理解できたと感じる。文章を記述する際、「どのように答えたらよいか分からない」という生徒が一定数いる。型を利用する、文例に従って書くということで形式の整った文章を書くことができる経験を得ることができたことは大きい。今後も型の定着を図るとともに、型に従いながらも、情報の分量や重要度など全体を俯瞰的に捉え、「現代の国語」におけるＢ「書くこと」(1）のアの内容をより深め、Ａ評価にあたる構成の工夫までより多くの生徒を引き上げる方法を模索していきたい。